

彭際清『華嚴念仏三昧論』について(三)

中 村 薫

筆者は、これまで二度に渡って(印仏31卷第一号・同34卷第一号に掲載)彭際清の『華嚴念仏三昧論』(以下『論』と略)について考察を加えてきたが、今回は最後部の五問答について考察していくこととする。

第一問答

彭際清は、前述の五門に関して、その門は、一門より順次入るのか、また、五門それぞれ並入するの各自問することより始めている。問に対し、彼は先ず次の如く答えるのである。

上根利智。了得_二自性弥陀。全顯_二唯心淨土。拳_一一法身。攝無_レ不尽。然理則頓悟。事須_二漸除。故華嚴教指_三。十住初心即_二同諸仏。然五位進修。不_レ無趣向。

彭際清によれば、機根のすぐれた菩薩は、その利智をもつて、而も自性念仏により、阿弥陀如来の法門と同体の自性を得るというのである。つまり、これらの五門は全て唯心淨土

を顯したものであるから、一法身に攝取して尽さないものはないというのである。ただそのことは認めつつも、更に理は頓悟であつて、事は漸々たるものであるということを加するのである。故に、華嚴教学では初住成仏、信滿成仏などを説示しているけれども、やはり、五位進修の大乗菩薩道の修習そのものが基本となつていふことに変わりはないのである。何故かといへば、もしいまだに未覚なる世界に住して、とても妙覺に至ることが出来ない者にとつては、階位はそっくりそのまま存在することになるからである。故に飽くまでも、十地に至つて始めて仏の大願力をもつて、一念に多仏を見ることが出来るというのである。

そして、更に彭際清は

此土行人。縱_レ能伏惑發悟。而未_レ証_二無生_一甯_レ迷_二後有_一。不_レ依_二仏力_一。功行難_レ円。必待_二回向衆邦_一。親承_二授記_一。淨_二諸余習_一。成_二滿願王_一。

と述べている。

重復するが、仏道を歩む行人が、たとえ迷いや惑いに打ち勝って発悟したとしても、そこでいまだ無性なる性を証明しなければ、その迷と惑から本当に覚悟したことになるのである。その理由は、ただ仏力の加被によって始めて仏道そのものが、自利他円満の道を歩ませることができからである。故に彭際清は

斯為二門超出妙莊嚴路。其或粗窺向上。未_レ尽_レ疑情。尤須專一持名。翹勤發願。如_三子憶_レ母。畢命為期。加以_三教觀_レ熏修。助_三發勝智。感心道交。功無_二虛棄。斯則全憑_二一念。便撰_レ諸門。

と述べるのである。彭際清によれば、妙莊嚴路は一門より超出されたものに違はないが、それは粗雑にして疑情を尽くしたとはいえないのである。従って、阿弥陀仏の名号を受持することに専念すべきであるというのである。それは、例えば、阿弥陀如来の發願を心にとめることは子の母を憶うが如くであるというのである。つまり畢命を期することも、教觀をもつて熏習することも、勝智を助發することも、感応道交して功用に虚棄のないことも、それら全て一念をたのんで諸門を撰取することであるというのである。

以上が第一問答における彭際清の結論である。

第二問答

ここでは、念仏の法を開闡しようと思うならば、何故、淨

土の諸經によつて引導しないのか。また、それをせずにはわざわざ華嚴を主軸とし、從果向因をもつて華嚴・淨土を合轍するのは何故かと自問するのである。

彭際清はその答えとして『仏説無量壽經』の叙の文にある皆遵_三普賢大士之德。具_三諸菩薩無量行願。安住_レ一切功德之法。

(大正12・265・c)

の文により、『仏説無量壽經』における普賢の行願を確認し、次いで

凡有_三三輩。其上輩者。捨_レ家棄_レ欲而作_レ沙門。發_三菩提心。一向專念_三無量壽佛。修_三諸功德。願_レ生_三彼國。略_三其中輩者。十方世界諸天人民。其有_レ至_レ心願_レ生_三彼國。雖_レ不_レ能_レ行作_レ沙門。大修_三功德。當_レ發_三無上菩提之心。一向專念_三無量壽佛。其下輩者。十方世_三佛。略_三界諸天人民。其有_レ至_レ心欲_レ生_三彼國。假使_レ不_レ能_レ作_三諸功德。當_レ發_三無上菩提之心。一向專意乃至十念。念_三無量壽佛。願_レ生_三其國。略_三(大正12・272・b、c、◎印筆者)

の文により上輩・中輩・下輩の三輩往生は、みな共に無上菩提心を發心することであるという。そして、更に『仏説無量壽經』の

不_レ了_三佛智。不思議智。不可稱智。大乘広智。無等無倫最上勝智。於_三此諸智。疑惑不_レ信。然猶信_三罪福。修_三習善本。願_レ生_三其國。此諸衆生。生_三彼宮殿。壽五百歲。常不_レ見_レ佛。不_レ聞_レ經法。不_レ見_三菩薩聲聞聖衆。是故於_三彼國土。謂_レ之_三胎生。若有_三衆生。明信_三佛智乃

至勝智。作諸功德。信心廻向。此諸衆生於七宝華中。自然化生。

(大正12・26・a~b)

第三問答

の文をもって、文殊の大乗智により、普賢の行願を建て、廻向して往生するというのである。

次いで『観無量寿經』の

凡生西方有九品人。上品上生者。若有衆生願生彼國者。

發三種心即便往生。何等為三。者至誠心。二者深心。三者廻

向發願心。具三心者必生彼國。復有三種衆生。當得往生。

何等為三。一者慈心不殺具諸戒行。二者說誦大乘方等經典。

三者修行六念。廻向發願生彼國。 (大正12・34・c)

の文により、上品上生に至る者は、至誠心・深心・廻向發願心をもって往生を得るというのである。その中、一つには慈悲心を末殺することなく諸々の戒行を具足し、二つには大方等經典を誦誦し、三つには六念を修行して、総じて廻向發願して彼の国に生まれんと願うのである。そして、取りも直さずこの大方等經典が、正しく『華嚴經』そのものであるというのである。

以上、この問答は、念仏法門を説く『仏説無量寿經』の勸進行人、三輩往生、『仏説観無量寿經』の上品上生の教説と、発菩提心を説く因果無差なる『華嚴經』の教説とが全く合一であるというのである。

ここでは、華嚴の法界觀は重々無尽であり、無量の修多羅をもって眷屬と為すのに、何故唯一念仏門のみを指して普撰とするのかと自問しているのである。

答えとして彭際清は、唯一念仏門に入るの方便によるというのである。それは『華嚴經』の

爾時善財。於普賢菩薩相好肢節諸毛孔中。見不可說不可說世界海。諸仏充滿。一如來。以不可說不可說大菩薩衆。以為眷屬。 (大正9・875・c)

の文により、念仏の人も同様に無量なる背景のもとに始めて一念に入るというのである。その論証として、先ず杜順の『華嚴法界觀門』により三門を立てている。

元より、この『華嚴法界觀門』は、杜順の著書であるか否か問題はありますが、澄觀の『華嚴法界玄鏡卷上』には「修大方広仏華嚴法界觀門。略有三重。終南山積法順俗姓杜氏」(大正45・62・a)とあり、宗密の『註華嚴法界觀門』には「京終南山積杜順集」(大正45・64・c)とある。何れにせよ、法藏の『華嚴發菩提心章』の一部と同じ内容である点のみても、華嚴教学の法界觀を明らかにするための論拠として重要視されていたことは理解できるであろう。

そこで、斯かる重要な三門の法界觀門とは如何なる内容の

ものなのか観てみると、彭際清は次の如く要約している。

一真空門。簡妄情以顯理。即前念仏法身是。二理事無礙門。融理事以顯用。即前念仏功德是。三周徧含容門。攝事事以顯元。即前念仏名字是。

①真空門では、理法界を顯すことに對して念仏の法身を當て、②理事無礙門では、理事の円融なる功用を顯すことに對して念仏の功德を當て、③周徧含容門では、事々を攝して無礙なることを顯すことに對して念仏の名字に當てている。つまり、彼は、この三門を念仏の自性直指の法身・報化二身の功德・最勝方便の名字に當てはめていることが理解できる。

次に彼は澄觀の四法界によって、一心に念仏して余業を離えなければ事法界に入るとし、心仏双泯して一真のみ独立して解脱すれば理法界に入り、即心即仏でその功用が顯障されれば理事無礙法界に入り、非仏非心で神妙不測であれば事々無礙法界にそれぞれ入ると述べ、次いで

故此經以毗盧為導。以極樂為歸。既觀弥陀。不離華藏。と述べ、『華嚴經』は毘盧舍那仏をもって引導となし、極樂浄土をもってその帰結とするというのである。

故に阿弥陀をまみえることは、蓮華藏世界を離れてはあり得ないというのが第三問に對する彭際清の解答である。

第四問答

ここでは、李通玄の『新華嚴經論』(大正36・159・b-c)によれば、浄土は権であり実ではないというが、今この『論』に従ったら如何に會通することができるとか問うのである。

彭際清は斯かる自問の答えとして、仏土を四種に別けることにより説明を加えている。元より、この常寂光土・実報土・有余土・同居土の四土の分別の仕方については、天台智顛の所立なることは周知のことである。即ち、智顛の著『觀無量壽仏經疏』に

四種浄土。謂凡聖同居土。方便有余土。實報無障礙土。常寂共土也。(大正37・188・b)

とあり、同じく天台の湛然の著『維摩經略疏』に

今略為四。一染淨國凡聖同居。二有余方便人住。三果報純法身居。即因陀羅網無障礙土也。四常寂光即妙覺所居也。(大正38・564・b-c)

とあるが如くである。

彭際清は、智顛の『疏』と順序を反對にし、①常寂光土を果仏の所居とし、②実報土を法身大土の所居とし、③有余土を二乗の所居とし、④同居土を凡聖淨穢交參の所居としている。そして、次の如く述べるのである。

此土行人。以專念力。修諸功德。回向西方。惑業未斷。生同居土。欣厭既切。粗漏漸除。聞法增進。生有余土。若修円教為因。深達実相。以普賢行願。廻向往生。便感得実報土。親

承弘記。分証。寂光。

この凡夫、聖人の雑居の同居土の行人は、一心専念に諸々の功德を修し、西方極楽の浄土の世界に往生すべき廻向の働きがあるにも抱らず、一方では娑婆世界において惑業を断ずることが出来ないため、凡夫聖人雑居することになり、従つてこの国土を同居土というのである。

次に浄土往生を欣い、穢土を厭うことに対して、既に区切りをつけ、粗漏なることを漸々に除くべき阿羅漢・辟支仏及び地前菩薩は、方便道を修して聞法を増進して有余土に生まれるというのである。

次に実報土とは、具に実報無障礙土ともいわれ、初地以上の法身の菩薩の所居であり、円教の実の因行をもって実相に深達して、普賢の行願をもって廻向して浄土往生する国土をいうのである。

最後は、前三が断証因果を述べているのに対し、ここでは妙覚極智の所照と名づけ、また常寂光土といい、正しく仏の住処そのものを指しているのである。

次いで彭際清は、権実の権に関して『法華経』の、小乗の覚悟は大乗の『法華経』に至るための方便であることを比喩的に言い表した「化城喻」(大正9・22・a)によって権実の権を明らかにしている。そして、実相を明かすものとして『華嚴経』、就中、「普賢行願品」末の西方極楽往生の如くで

あるとしているのである。故に浄土一門は、常にたやすく分別を生じるために、却つて願の経文についてみれば、相互に乖刺してしまふというのである。だから、当然のこととして真に従り幻を起こし、幻に即して真を全うし、生滅俱に離れて、自他不二なることを知るべきであるというのである。以上、李通玄の、一念円融・一乘中道の了義を提唱し、初住成仏の理を明かし、その後

若依自力。譬彼群氓騷希宝位。即謂本來是仏不墮階臺。亦頼善巧方便。始能尅証。隨如末行願卷中說。以深信心。持誦十大願王。一刹郡中往生極樂。住不退転。從凡夫地。創發信心。橫超直入。至円至頓。無比無倫。幸遇完經。因緣非淺と述べるのである。正しく「普賢行願品」末(大正10・846・c)に説示されているが如く、深信の心で十大願王を持誦すれば、一刹那中に西方極楽に往生して不退転に住すと説かれてあるが如くである。故に凡夫地より信心を發こし横超に直入するというのがこの問答の結論である。

第五問答

ここでは、曇衍法師の弟子である僧靈幹(靈弁の伯父)は、臨終に当り大水遍満して、華の車輪の如くなるを見て、その上に座し、願ぜられるところが満了したというが、それなのに何故更に阿弥陀仏にまみえなければならぬのかを問うの

である。

問いに対して、彭際清は、蓮華藏世界には不可説の仏刹微塵数の香水海があり、西方極楽もその香水海の中にあることを説き、『首楞嚴経』の

若飛心中兼福兼慧。及興淨願。自然心開見十方仏。一切淨土。隨願往生。(大正19・142・b)

の文により、淨土往生の願を明かすのである。

ところで、彭際清は、靈幹の往生した所は極楽淨土なのか他方淨土なのか今だに判然としないが、弥陀にまみえ、蓮華藏に趣かんとしているということに間違いはないという。それは、『華嚴経』の「入法界品」に登場する善財童子の求道の状況と、南天竺の龍樹菩薩の教学とを見ても明らかであるというのである。そして、彭際清は、更に近事をもって答えんとするのである。つまり『仏祖統紀』(大正49・243・a~b)の「法師道因」に関する文を全文引用してその確信を述べるのである。今、その文を要約すると次の如くである。

宋の明州の草庵道因も、円頓の教觀を修習し、晩年に延慶寺を主住とし、乾道三年(一一六七)四月十七日に徒衆と別れを告げ、「華嚴の世界は洞徹湛明である。甚だ我が懐憶に適合しており、今將に行かんとす」と言ったという。そして「たとえ阿弥陀仏を念じて弥陀にまみえなくとも決して厭うことはない」と言い、讚歎し畢り、仏を唱すること數百にし

て『觀無量壽経』を誦誦して上品上生に至り、念仏を斂めてその坐に亡脱したというのである。

以上の如く、彭際清は、靈幹・道因の教觀をもって答えた後、次のように結論づけているのである。

極楽華嚴。是同是別。諸有智人。急須著眼。

さて、以上五問答の概略についてみてきた訳であるが、彭際清はこの『論』を決して華嚴の蓮華藏世界と、淨土の極楽往生の世界を比較検討して優劣をつけるために著したのではなく、また、単に教学的に兩者の融合を試みるため著したのでもなく、むしろ

復出前稿一点勘再周、録成此本。

と述べているが如く、念仏三昧の実践道としてこの書を何度も点勘して再周筆録しているのである。そして

此論時有益。其後數年。自錢塘帰。重閉関文星閣中。修念仏三昧。長夏寥寂。

と述べていることからすれば、彭際清自ら、常に念仏三昧を修し続けていたことが充分理解できる。

故にこの『論』は、正しく教淨一体を顯して一乘を説くと共に、今一つ彼にとつては念仏三昧を習する実践をもとにして著した書ということができ得るであらう。

ハキーワード√ 華嚴念仏三昧、彭際清、教淨一体

(同朋大学講師)